

基盤教育機構の現況と課題～基盤教育の充実のために

梅 村 修

Achievement and Issues of Institute of Liberal Arts

Osamu UMEMURA

【キーワード】 基盤教育機構 基盤教育科目 教養教育 卒業要件 専門基礎科目

1. 基盤教育機構の成り立ち、特殊性

基盤教育機構は、一貫連携教育機構（2012年4月設立）、地域文化創造機構（2012年4月設立）に次ぐ3番目の機構として、2013年4月に発足した大学附置の組織である。機構長、副機構長をいただき、既存の学部と同様、特任助教・専任講師・准教授・教授という職階をそなえ、教授会を有する。所属教員が、研究・教育・社会貢献・学内業務を任務とするところも、学部と何ら変わるところはない（注1）。また、学部の「学部長補佐」に相当する職員が、「機構長補佐」として教授会のメンバーになっている点も、基盤教育機構が学部と同等の組織であることを示している。

基盤教育機構は、全国的に見ても数少ない、共通教育（教養教育、一般教育、基盤教育、様々な呼び方がある）に特化した専任教職員からなる組織である。他大学にも似たような組織はあるが、語学やキャリアを専門にする学部教員が、共通教育を統括するセンターや機構を兼職していることが多く（注2）、大学全体の共通教育全般にわたって、意思決定できる権限を備えた教員組織は少ない。

基盤教育機構は、追手門の教養教育全般に大きな責任を負うと同時に、学部教育にとらわれない自由な発想で、新しい教養教育を創出することを期待されている。

2. 基盤教育機構が権限を振るえない構造的な問題について

しかし、今の基盤教育機構は、必ずしも自らの意思決定を具現化する力を備えているとはいえない。最大の問題は、学生の卒業要件を定める権限が、各学部の教授会にゆだねられている、

ということにある。もっとも、基盤教育機構を卒業する学生はいないのだから、これは当然のことだ。しかし、基盤教育機構は学生の教養教育全般に責任を負う立場でもある。基盤教育におけるディプロマが、基盤で一元管理されていてもなんら不思議ではない。現に、基盤教育機構は学位授与方針（ディプロマポリシー）案を示している。

具体的な事例に即して問題を摘出してみよう。

たとえば、2015年7月2日の教務主事会で、基盤教育機構は、時間割のいわゆるパッケージ化の方針にしたがって、「新入生演習」の統一テキスト化のさらなる推進、「入門コンピュータ」と「追手門UI論」の全員履修化、選択必修の体育科目の春学期抽選登録の廃止、および曜日クラス指定化、英語教育の現状維持等を提案した。

ところが、その後、社会学部が体育科目を選択にしたいと言い始め、経済学部と心理学部が「追手門UI論」の全員履修化に難色を示し、社会学部が英語を週2回の全員履修科目にしたいといったはじめ…といった調子で、どんどん基盤の提案が「骨抜き」にされていく。「骨抜き」という言葉が不穏当ならば、学部の都合で「変更」されていく。基盤としては、卒業要件の決定権があくまでも学部教授会にあるので、なすすべがない。指をくわえて、学部の意向を見守るしかない。つまり、基盤教育機構は、追手門の教養教育全般に責任はあるが、権限を振るえない、ということだ。

さしあたって、今の基盤教育機構にできることは、基盤教育科目のメニューを多彩に取りそろえ、学部に「全員履修にしませんか」と提案することまでで、そこから先は、学部の教授会の顔をうかがうことしかできない。このように「基盤教育機構が“構造的に”力をふるえない」という状況をなんとかしない限り、本学の基盤教育の抜本的な改革、早急な充実はなかなか進捗をみないだろう。

3. 「専門基礎科目」という新たな“問題”

もう一つ、困った問題が出来てきている。それは、初年次生の教育課程の中に、どんどん学部の「専門基礎科目」の必修化がもくろまれていることだ。

社会学部も経済学部も心理学部も、初年次のうちに専門に力を入れたいと言い始めている。それはそれでよいことだ。せっかく大学に進学したのに、「読み書きそろばん」科目やStudent skill・Social skill系の科目ばかりでは、新入生も物足りないだろうし、大学での学びの将来設計も立てづらいだろう。心理学部のように、他大学の心理学部との過当競争に備えて、公認心理士の国家資格取得に対応する新カリキュラムを導入せざるを得ない内輪事情もよく理解している。

しかし、CAP制（春学期18単位、秋学期22単位）の上限があるかぎり、「専門基礎科目の充実」

と「基盤教育科目の充実」はかならずバッティングする。下の表1をご覧ください。2016年度の初年次の春学期に、経営学部と国際教養学部は6単位、心理学部にいたっては8単位も必修に指定している（2015年8月現在）。18単位のうち、半分近くも学部の専門基礎科目で占められては、初年次生は基盤教育科目が思うように履修できない。

表1 2016年度生用 専門基礎科目(予定)

学科	春学期		秋学期	
	科目名	単位数	秋学期	単位数
EE			基礎経済学	2
MM	経営学入門	2	マーケティング入門	2
	会計学入門	2	経営情報入門	2
	ビジネス法学入門	2	ビジネス心理入門	2
MA	マーケティング入門	2	経営学入門	2
	経営情報入門	2	会計学入門	2
	ビジネス心理入門	2	ビジネス法学入門	2
JJ			地域創造学入門	2
FS			人間と社会	2
PP	心理学概論	2	心理学実験実習	2
	心理統計法1	2	心理統計法2	2
	認知・脳科学入門		心理学の総合的理解	2
	生涯発達・生涯教育心理学入門	この中から4 単位		
	臨床心理学入門			
	社会・犯罪心理学入門			
CA	専修中国初級講義1 専修中国初級講義3	4	専修中国初級講義2 専修中国初級講義4	4
	専修中国初級会話1	2	専修中国初級会話2	2
CE	英語リーディング1	2	英語リーディング2	2
	英語ライティング1	2	英語ライティング2	2
	英語クリニック	2		

4. 基盤教育の充実のために何ができるか

基盤教育機構が鳴り物入りで発足して2年半が過ぎた。その間、「個性と協働力をみがくゼミナールの追手門～生きる力、学ぶ力、考える力を育成する追大型リベラルアーツ教育」というスローガンのもと、基礎科目・教養科目・キャリア科目・総合科目の整理・統合、コース専用科目の設置、少人数・双方向・参加体験型科目の設置、教授会の改革、自校教育の充実、初年次の時間割固定化など、追手門の教養教育の改革はある程度の進捗を見た。

しかし、一方で、先にみたように、学内における基盤教育科目の地位は依然として低く、学部の専門教育の下請け的な立場に甘んじている。この現況をどうしたら打開できるか、次に考えてみたい。

4-1 基盤教育機構の存在意義の再確認

まっさきにしなければならないことは、なぜ追手門学院大学に、全学の教養教育に責任を持つ、本格的な教員組織ができたのか、ということ、改めて考えてみることである。

「追手門学院大学 基盤教育機構規程（2012年12月15日制定）」には、基盤教育機構の設置の目的が次のように記されている。

基盤教育機構は、本学の建学の精神に基づき全学的な協力体制のもとに、学生の生涯にわたる学修の基盤となる教養を身につけ、生きる力・学ぶ力・考える力を育成するための教育を確立し、その充実を図る（下線筆者）。

追手門学院大学では、1991年の「大綱化」から1992年にかけて、一般教育科目を担っていた旧文学部が中心となって、「文学部カリキュラム改革委員会（以下、委員会）」が設置され、「大綱化」に呼応したカリキュラム改革が進められた。委員会は、各学部からの委員と、体育教室・第二外国語教室・一般教育教室・資格課程からの委員によって構成された。委員会では「専門科目を重視し、初年次から専門教育科目を教えるべきだ」という意見が大勢を占めたそうである。その結果、一般教育科目の一律履修形式は廃止され、カリキュラムの編成や運用は、学部・学科に委ねられることになった。

外国語を例にとれば、文学部はもとより、経済学部にも経営学部にも英語担当の専任教員が分属し、各学部の特性に合わせた英語教育が行われることになった。また、基本科目（今の教養科目に相当）は、科目分類が「人文」「社会」「自然」から「Ⅰ類」「Ⅱ類」「Ⅲ類」と変更され、翌年には「言語と文化」「個人と社会」「人間と自然」になった。

しかし、大学全入時代を迎え、志願者減、偏差値低下、学習意欲の低下、学習習慣の希薄化、退学者の増加などが、本学でも大きな問題となって浮上し、全学共通で基礎的教養の再構築をはからなければならなくなった。こうした時代的な要請から基盤教育機構が設立されたことは、何度確認してもしすぎることはない。

しかし、問題はその先にある。

それは、教授会を備え、教養教育に特化した教員組織を新設した意義が、本学の教職員に十分理解されていないということである。

基盤教育機構は、専門に差し掛かる以前の導入教育だけをする教員組織ではない。教養教育とは、学士課程全体、さらには生涯にわたる学修の基盤としての教養を身につけさせる教育である。けっして、学部の専門教育に従属するものではない。“基盤”というと、どうしても専門教育の前段階、もしくは下位に位置づけられ、程度の低い教育課程とイメージされがちだが、追手門学院大学においては、専門教育と教養教育は等価であり、並び立つ2本の柱である。学科科目と基盤教育科目は、学年進行とともに相互に影響を与え合い、横に連携していく。基盤教育科目の上に専門科目が積みあがっていくのでは断じてない。もちろん、「学ぶ力」を育成する初年次科目などは、文字通り専門以前の基礎固めの科目だが、キャリア科目や教養科目は、

4年間通して、段階的に順次性をもって学修すべき科目である。この点が大綱化以前の一般教養科目とも、大綱化以後の共通科目とも違うところである。この自明の前提が、多くの教職員に認識されていない。それがために、基盤教育科目をどこか下に見る風潮がなくなる。

言い換えれば、追手門学院大学は、基盤教育機構ができたことによって、二つの顔を併せ持った学生を育成する大学に生まれ変わった。すなわち、“専門人”としての顔と“教養人”としての顔を、二つながら備えた学生像である（当然、専門とは何か、教養とは何かという原理的な議論が先立たなければならないが、それはひとまず措こう）。いうなれば、追手門に入学する学生は、心理学部なり経済学部なりを受験して、学籍上は学部の学生だが、実は基盤教育機構にも同時に入学しているのである。そして、4年後には“専門人”になって学部を卒業すると同時に、“教養人”ともなってディプロマを授けられるのである（基盤教育機構にディプロマポリシーがあるのはそのためである）。つまり、追手門に入学した学生は実質的にはダブルディグリーを手にすることになる。

4-2 卒業に要する最低習得単位124単位の内訳の見直し

追手門学院大学に勤務する教職員一人ひとりが、なぜ基盤教育機構が創設されたかを再確認し、その存在意義を共有するために、弛まない努力を続ける一方で、実務的に手掛けなければならないことは、基盤教育科目と学科科目の卒業要件単位数の見直しである。

2015年度の基盤教育科目と学科科目の内訳を見てみよう（表2）。

表2

卒業要件単位(124単位)の学部・学科ごとの内訳

	基盤教育科目	学科科目
経済学部	30単位以上	64単位以上
経営学部	30単位以上	66単位以上
地域創造学部	40単位以上	72単位以上
社会学部	30単位以上	66単位以上
心理学部	30単位以上	66単位以上
国際教養・アジア	20単位以上	62単位以上
国際教養・英コミ	22単位以上	56単位以上

↓
50単位以上

124単位のうち、基盤教育科目の最低習得単位数は、経済と経営と社会と心理が30単位以上、地域が40単位以上、アジアが20単位以上、英コミが22単位以上、と定められている。一方、学科科目の最低習得単位は、経済64単位以上、経営と社会と心理が66単位以上、地域は72単位以上、アジアが62単位以上、英コミが56単位以上と定められている。この割り振りを、もっと基盤教育科目に傾斜配分し、最低修得単位数を50単位以上にまで引き上げれば、基盤教育科目の

重みは相対的にあがる。

たとえば、現在、基盤教育科目の中には多彩なキャリア科目が開講されている。ところが、キャリア科目には、全学部、卒業要件として124単位中、たった4単位が課されているに過ぎない(表3)。学生は1年次に「キャリアデザイン論」(2単位・全員履修)を履修したら、残りは2単位で足りるから、その先にある「キャリア形成論」も、「社会人の基礎」も、「表現コミュニケーション」や「プロジェクト」も必ずしも履修する必要がない。全学的なキャリア形成が急務とされているのに、そんなことでいいはずがない。

教養科目も同様である。専門を超えた幅広い知識を身につけることは、その多くがゼネラリストの人生を歩む追手門の学生にとって、とても大事なことになるのに、6単位(地域創造学部は18単位)とれさえすれば卒業できてしまう。

表3 学科科目と基盤教育科目の卒業要件単位数の内訳一覧

学科科目	経済学部	経営学部	地域創造学部	社会学部	心理学部	アジア学部	国際コミュニケーション学科
基盤教育科目	64単位以上	66単位以上	72単位以上	66単位以上	66単位以上	62単位以上	66単位以上
基礎科目群	30単位以上	30単位以上	40単位以上	30単位以上	30単位以上	30単位以上	22単位以上
基礎科目群	10単位以上	10単位以上		10単位以上	10単位以上		
初年次科目							
外国語科目	4単位以上	4単位以上	2単位以上	4単位以上	4単位以上	2単位以上	2単位以上
体育科目	2単位以上	2単位以上		2単位以上	2単位以上	2単位以上	
教養科目群							
人文・社会・自然系	6単位以上	6単位以上	(人文・社会・自然から) 18単位以上	6単位以上	6単位以上	6単位以上	6単位以上
オープンゼミ							
日本事情							
キャリア科目群							
キャリアデザイン論							
プロジェクト入門							
インターンシップ基礎							
インターンシップ実習							
キャリア形成論							
社会人の基礎							
プロジェクト	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上	4単位以上
表現コミュニケーション							
グローバルキャリア論							
教員への道							
教師力養成演習							
全学教職ゼミ							
教職教養演習							
リーダーズ・スクール・ゼミナール							
総合科目群							
造大UI科目			(造大UI科目から) 8単位以上				
スポーツキャリア科目	2単位以上	2単位以上		2単位以上	2単位以上	2単位以上	2単位以上
国際交流科目							

4-3 基盤教育機構の人事の刷新

もう一つの打開策は、基盤教育機構の人事の刷新である。

先述のように、基盤教育機構には、現在16名の教員が配属されている。その主な担当科目による内訳は、キャリア関連科目4名(秦敬治教授、池田輝政教授、田上正範准教授、吉村大吾講師)、語学科目5名(水藤龍彦教授、武田裕紀教授、立堀尚子語学常勤講師、森田まき語学常勤講師、岩田聖子語学常勤講師)、新入生演習1名(村上亨教授)、体育科目3名(松井健教授、千葉英史准教授、巽樹理特任助教)、「読み書きそろばん」科目1名(樋口勝一教授)、自校教育科目1名(梅村)、教養科目1名(加村隆英教授)となる。

この顔ぶれと主担当科目を見ると、基礎科目とキャリア科目にはそれなりに専門家が配属されている（英語の専任教員がいないという大問題はひとまず措く）のに対して、教養科目を担当する教員が相当に手薄なことがわかる。

私は基盤教育機構が軽視される理由の一つがここにあると思う。基盤教育機構は全学の教養教育に責任を持つといいながら、力点は初年次の適応教育やリメディアル教育に傾きがちで、肝心の教養科目は学部の専任教員に大きく依存しているのである。学部の教員にしてみれば「基盤教育の教養科目に持ちコマを供出している」という思いがあるのだろう。学部の先生方がつむじを曲げれば、追手門の教養科目は成り立たず、基盤教育機構も面目を失う。

そろそろ基盤教育機構は、基盤教育科目に親和性の高い、学部専任教員を迎え入れて（基盤教育機構に移籍していただいて）、基盤の教員として授業を担当していただくことを考えていいかもしれない。そうすれば、基盤教育機構の地位は少し上がるだろう。

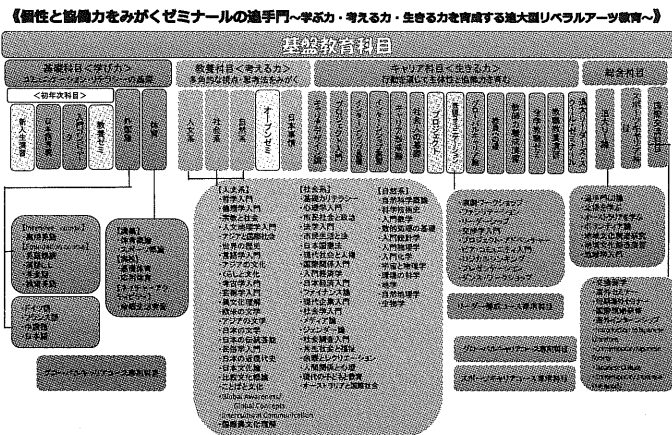
おりしも近く国際教養学部で大がかりな改組が予定されていると聞く。また、各学部に分属する体育科目担当教員、語学担当教員、情報科目教員も数名いる。そうした学部の専任教員にこぞって基盤教育機構に移っていただき、基盤教育科目をご担当いただく、ということである。

5. 基盤教育機構の新しい教育

ここでは、基盤教育機構が本学で権限を持ちえない根深い問題はいったん棚上げして、基盤教育機構が、発足から現在まで積み上げてきた教育プログラムの話をしよう。

基盤教育機構が統括する基盤教育科目を、4つの科目群（基礎科目、教養科目、キャリア科目、総合科目）で構造化し、模式図化すると、下の表4のようになる。

表 4



基盤教育機構のディプロマポリシー（学位授与方針）は、まだ案の段階なので、「個性と協働力を磨くゼミナールの追手門～生きる力、学ぶ力、考える力を育成する追大型リベラルアーツ教育」という、基盤教育機構のスローガンが暫定的なDPに位置づけられるだろう。

左端の科目群は「学ぶ力」を育成する「基礎科目」で、その傘下に、初年次科目として「新入生演習」、「日本語表現」、「入門コンピュータ」、「教養ゼミ」が配されている。また、外国語科目と体育科目とグローバルキャリアコース専用科目（の一部）も「基礎科目」に位置づけられている。

真ん中左寄りの科目群は、「考える力」を育成する「教養科目」で、人文、社会、自然の3分野の科目群のほかに、2016年度から教養ゼミの発展形として、2回生以上に開講される「オープンゼミ」、外国人留学生対象の専門科目「日本事情」が配される。

真ん中右寄りの科目群、「生きる力」を育成する「キャリア科目群」には、キャリア関連科目（「キャリアデザイン論」、「インターンシップ」、「キャリア形成論」）、プロジェクト科目（「プロジェクト入門」、「プロジェクト」）、表現コミュニケーション科目（「ファシリテーション」、「リーダーシップ」、「交渉学入門」、「演劇ワークショップ」、「ダンスワークショップ」、「プレゼンテーション」、「ロジカルシンキング」、「ピアコミュニティ入門」、「プロジェクトアドベンチャー」）、教職関連科目が配される。また、2015年度発足し、目覚ましい成果を上げているリーダー養成コース専門科目も「キャリア科目」に位置づけられる。

右端の科目群、「総合科目」には、追大UI科目、なかでも母校教育を扱う「追手門UI論」や、国際交流科目が位置付けられる。

網掛けになっているのは、少人数、双方向、参加体験型の協働学習、すなわち「ゼミナールの追手門」という基盤のスローガンを体現する科目である。

この模式図は、長らく研修会やFD講習会で、基盤教育科目の全体像を示すのに重宝に使われてきた。たしかに、網羅的、俯瞰的ではあるが、この一覧表には、学生を正しい履修にナビゲートする手立てや工夫が施されていない。4つの科目の狙いや目的も明記してあるし、「初年次科目」というくくりもある。だが、これをカリキュラムマップとは言えないのである。学生にとっては、各科目の目指すラーニング・アウトカムがわからないし、どの道筋を辿って科目を履修すればいいか、見通しが立てられないからだ。また、専門の科目とのつながりはどうなっているのかもわからない。

2015年8月現在、策定中の最新のカリキュラムマップが表5である。文字が小さくてざっくりとしかお伝えできないが、同心円の楕円形に上向きの矢印が施してあり、中心から外延に行くにしたがって、基礎教養科目から専門科目に導かれるようにイメージされている。このマップの説明をするためには、2016年度に向けて、われわれ基盤教育機構が、教授会やワーキング

グループで議論を重ね、やっとの思いで作り上げ、7月2日の教務主事会で検討された履修案(表6)を説明しなければならない。

表5

基盤教育機構カリキュラム・マップ

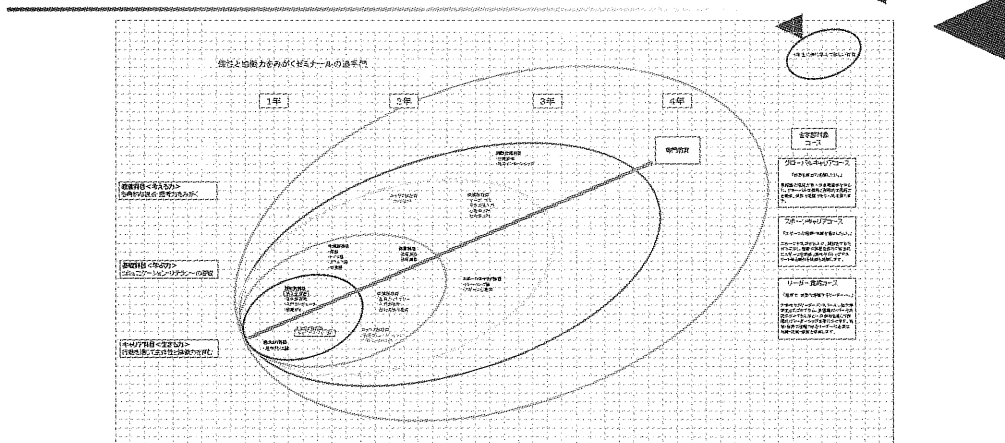


表6

2016年度 初年次生対象 主要な基盤教育科目の概要

	配置	種別	抽選登録	クラス指定	開講学期	1クラス人数	クラス数(春)	クラス数(秋)	総クラス数	授業の形式	担当者
新入生演習	基礎科目(初年次科目)	全員履修	なし	あり	春	20	85	—	85	演習	村上
入門コンピュータ	基礎科目(初年次科目)	選択 →全員履修	なし	あり	春・秋	不統一				講義、演習	樋口
追手門UI論	総合科目	選択 →全員履修	なし	あり	春・秋	170	5	5	10	講義、演習	梅村
英語	基礎科目	選択→必修→選択	なし	あり	春・秋					演習	岩田・森田・加村
教養科目群	教養科目	選択→全員履修	なし	あり	春・秋	35	25	25	50	講義、演習	吉村
キャリアデザイン論	キャリア科目	全員履修 →選択	なし	なし	春・秋		—			講義、演習	吉村
日本語表現	基礎科目(初年次科目)	選択→全員履修→選択	なし	なし	秋		—			演習	水藤
体育科目(実技・講義)	基礎科目	選択必修(地域以外)	なし (春のみ)	あり (春のみ)	春・秋					実技、講義	松井・千葉
教養ゼミ	基礎科目(初年次科目)	選択	あり	なし	春・秋	20				演習	加村
プロジェクト入門	キャリア科目	選択	なし	なし	春		1	—	1	講義、演習	吉村
数的処理の基礎	教養科目→基礎科目(初年次科目)	選択	なし	なし	春・秋	400	2	2	4	講義、演習	樋口
プロジェクト	キャリア科目	選択	あり	なし	秋	20	—			演習	吉村
基礎カリテラシー→基礎カリテラシー(社会)	教養科目→基礎科目(初年次科目)	選択	なし	なし	春・秋	120~200	1	1	2	講義	古川
入門物理学1	教養科目→基礎科目(初年次科目)	選択	なし	なし	春	120~200	1	—	1	講義	樋口
基礎カリテラシー(自然)表現	キャリア科目	選択	あり	なし	春・秋	30~60				演習	田上
コミュニケーション	基礎科目	選択	あり	なし	春・秋					演習	武田
独・仏・中国語	基礎科目	選択	あり	なし	春・秋					講義	教務課 履修キャリア支援課 基盤教育機構
キャリアに直結する基礎教養科目群	教養科目	選択			春・秋						

まず、全部で春秋合わせて983クラス（予定）も開講されている基盤教育科目から、新入生に、ぜひ履修してほしい科目（群）を17、絞り込んだ。

つぎに、この17の科目（群）について、科目の重みづけを考え直した。というのも、基盤教育科目は、「新入生演習」と「キャリアデザイン論」と体育科目をのぞいて、ほとんどすべてが選択科目だからだ。おりしも、教学担当の秦敬治副学長（当時）から、初年次春学期の時間割のパッケージ化、クラスの固定化の方針が示されたので、あらたに、「入門コンピュータ」と「追手門UI論」を全員履修科目に指定した。

そしてもう一つ、科目の配置換えを断行した。2016年度から始まる「キャリアに直結する基礎教養科目」のための導入科目、いわゆる「読み書きそろばん」の科目を、初年次科目に移し替えることにした。具体的に言うと、「数的処理の基礎」、「基礎力リテラシー」、「入門物理学1」の3科目である。これらの科目は、すべて教養科目の中で埋没しており、このままでは将来、公務員試験やSPI試験や教員試験を志す新入生の履修を促すはたらきをはたさない。

こうして、①主要な基盤教育科目をピックアップし、②科目間の重みづけを施し、③配置換えをすることで、大事な基盤教育科目の取りこぼしのないようにしたかった。

表7 基盤教育科目 1年次～2年次 履修モデル
（ は、少人数、双方向、参加体験型の協働学習）

	1年次 春 (第1セメスター)	単位	1年次 秋 (第2セメスター)	単位	2年次 春 (第3セメスター)	単位	2年次 秋 (第4セメスター)	単位
必修系 全員履修系	新入生演習	2	入門コンピュータ2	2				
	入門コンピュータ1	2						
	追手門UI論	2						
	進大BASIS (協働学習) (専門基礎科目)	?	(専門基礎科目)	?				
	小計	⑥+	小計	④+	小計		小計	
選択必修系	体育 (実技)	1	体育 (理論)	2				
	小計	①	小計	②	小計		小計	
選択 (基盤) 系	教養ゼミ	2	教養ゼミ	2	オープンゼミ	2	オープンゼミ	2
	プロジェクト入門	2	プロジェクト	2	外国語1 (英・仏・中)	1	外国語2 (英・仏・中)	1
	表現コミュニケーション	2	表現コミュニケーション	2	実用英語	2		
	基礎力リテラシー (自然)	2	基礎力リテラシー (社会)	2	キャリア形成論1	2	キャリア形成論2	2
	(専門基礎科目)	?	(専門基礎科目)	?	キャリアに直結する基 礎教養科目	2	キャリアに直結する基 礎教養科目	2
	(英語)	2	(英語)	2				
	(数的処理の基礎)	2	(キャリアデザイン論)	2				
			(日本語表現)	2				
	基礎教育科目 単位合計	⑦+		④+				
	履修希望単位数	⑧		⑥		⑥		⑥

上の表7は、こうしたナビゲートにしたがって、“聞き分けのよい学生”が作成するであろう理想的な時間割のモデルである。初年次春学期の履修上限単位は18単位、その中で、必修・全員履修系の科目が「新入生演習」と「入門コンピュータ1」と「追手門UI論」、選択必修が体育実技、選択系が「表現コミュニケーション」や「教養ゼミ」といったゼミナール、および「読み書きそろばん」系の初年次科目。一方、秋学期は、履修上限単位が22単位に増えて、必修・全員履修系の科目が「入門コンピュータ2」、「追手門UI論（春に履修していない場合）」、選択必修が体育講義、選択系が、ゼミナールや初年次科目に加えて、「日本語表現」や「キャリ

アデザイン論」である。ここからは、この表7に沿って、一つひとつ説明を加えていきたい。

5-1 新入生演習

- (1) 2015年度から「知へのステップ」(第4版 くろしお出版)を、統一テキストとして新入生に指定している。新入生はこのテキストとバインダーのセットを1800円で購入する。この教科書は、すでに全国110大学の「新入生演習」や「フレッシュマンセミナー」で使われている(採用冊数は13885冊 出版元調べ)。つまり、本邦において、現段階で、もっともスタンダードで、使い勝手の良い教科書と言ってよいだろう。この春学期中、各学部の「新入生演習」の担当教員に使っていただいて、アンケートもとった。予想されたように、いろいろと批判はあった。たとえば、テキストの内容が、学生のレベルにあっていないのではないか、関心や興味をひくものとはいえないのではないか、などだ。なかには、「なぜ買わせるんだ、買わせなくてもいいじゃないか」と言い募る先生もいないではない。が、来年度も1800名の新入生全員に買わせる方針に変わりはない。先生方には「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」という気構えで使いこなしていただきたいと思う。帯に短く、襷に長い部分は、学部特性や各教員の個性に合わせてカスタマイズしてもらって構わない。何よりも担当教員が、「このテキストで教えることが面白い」と意義を感じてくれないければダメだ。
- (2) 「知へのステップ」は「新入生演習」の授業だけに使うものではない。4年間にわたって、参考書がわりに、あるいは辞書代わりに、使うものと考えてほしい。
- (3) 「知へのステップ」のワークシートを有効活用するためにPPTを使いたいという声が上がっている。しかし、パソコン教室の数に制限があるので、基盤から要望書を出して、教務課か情報メディア課に、PCとプロジェクターを購入していただき、語学で使うCDラジカセのように常備する予定がある(注3)。
- (4) 秋学期にはユニバーサル・パスポートのアンケート機能を使って、春の新入生演習のアンケートを実施する予定である。授業はどうだったか、テキストは役に立ったか、ワークシートは活用できたか、など。
- (5) 「知へのステップ」の筆頭編者である関西国際大学の上村和美先生には、2014年度末から2015年度の7月まで、三たび「知へのステップ」の講習会をしていただいたが、今後は、基盤教育機構が独自の講習会を取り仕切っていきたい。
- (6) SPIや一般常識などの就職筆記試験対策、公務員試験対策に向けた基礎固めを1回生から行う取り組みの一環として、今年度からマナトレ(学びのトレーニング)という基礎学力の確認テストを導入した。春学期は、新入生演習の2コマを使って、試験および解説を行ったが、「簡単すぎる」、「キャリア意識の醸成につながっているのか」という声もある。2回生からの「キャリアに直結する基礎教養科目」へ新入生を促すというマナトレの趣旨を再確認

し、この趣旨に沿った問題作成、事後指導をしてほしいと専門業者（Benesse i-Career）に見直しを依頼している。

5-2 入門コンピュータ

- (1) 全員履修、統一シラバス、検定導入という基本方針のもと、樋口勝一教授の尽力で、2015年度はシラバス統一に見通しがつき、ほぼ全員履修の状態となった。また、検定試験の受験指導も功を奏し、合格者もたくさん出している。この科目の目的は、ワード、エクセル、パワーポイントに習熟した学生を育てることである。
- (2) 来年度以降、大きな問題が3つある。一つは教室配当の問題、一つは担当教員の問題、もう一つは習熟度別クラス分けの問題である。
- (3) 教室配当の問題は、設置認可の縛りが外せない地域創造学部を除いて、180名収容のフォーラム教室と、75名収容の中規模教室をフル稼働して、何とかしのぐしかない。教室サイズによって、受講者人数に不均衡が生じるのはやむを得ない。新入生全員にiPadを持たせれば、普通教室でも開講可能になるが、まずはデスクトップ型PCの操作に習熟することが先決であると判断している。
- (4) 担当教員の問題。今は専任教員、非常勤講師、そして基盤の樋口教授の6人態勢で回している。しかし、来年度は全員履修科目になり、さらに社会学部、経済学部、経営学部の定員増が認可され、おのずとクラス数が増えて、新たな担当教員が必要になる。専任、非常勤に加えて、パイロットケースとして、外部委託を考えたい。専任教員、非常勤講師、業者の3者で回してみても、検定の成果を見比べたうえで、2017年度に備えるという予定がある。将来的には、全面的な業者委託を目指す。業者のほうが大人数のスキル指導に習熟しており、なおかつ3年ごとの雇用の見直しも必要なのではないか、と考えるからだ。
- (5) 習熟度別クラス分けの問題。心理学部から習熟度別クラス分けの要望が出ている。社会学部や経営学部や心理学部で定員増が認められ（社会150→230、経営・経営学科200→220、経営・マーケティング学科200→220、心理200→220）、おのずとクラスを二つに分けざるを得ない。ただし、クラス分けテストを実施することが困難なので、学生の自己申告制でクラス分けし、教授内容はそのままに、進度に緩急をつけるような配慮をする。
- (6) 2016年度は、樋口教授が春のみならず秋も担当する。ただし、樋口教授は教職支援センターが本務であり、「入門コンピュータ」を主業務にするわけにはいかない。基盤にあらたな入門コンピュータ担当者が必要ではないか。
- (7) 今年は授業中に検定試験の紹介をし、受験の申し込みを支援した。その結果、多くの合格者を出すことができた。春学期に行われた日本語ワープロ技能標準試験3級では、受験者93名、合格者82名、合格率88.2%という成果であった。来年度は、就職キャリアの資格サポー

トコーナーとも連携をとって、検定の本格導入を検討している。

- (8) 検定に合格した学生をTAにし、ピアサポート体制を整えることも視野に入れる。
- (9) 将来的には、最終試験もしくは外部の検定合格者から、単位を認定していくことにすれば、授業に緊張感がもたらされるのではないかな。ちなみに、ゼロ単位必修は教職科目の絡みでできない。

5-3 追手門UI論

- (1) 今年の春学期は、CAP制から外して、月曜日から金曜日まで、3時間目にずらりとコマを並べた。その結果、約500名の新入生が履修した。5人のコーディネータのもと、毎回、オムニバス形式で、教員、事務職員、在学生、卒業生、校友会会員、外部講師、理事長・学長・副学長が次から次と登壇した(表8)。

表8 2015年(平成27年)度 追手門UI論(自校教育講座 3時間目・5606教室)～一歩、踏み出す気持ちを！
登壇者シフト表

月曜日(履修登録者数151名) コーディネータ 野村 孝先生	火曜日(履修登録者数122名) コーディネータ 長岡 浩子先生	水曜日(履修登録者数122名) コーディネータ 池田 輝政先生	木曜日(履修登録者数111名) コーディネータ 山本 直子先生	金曜日(履修登録者数141名) コーディネータ 梅村 修先生
1 4/8 オリエンテーション 特選山合会訪問	4/7 オリエンテーション 特選山合会訪問	4/6 オリエンテーション 特選山合会訪問	4/9 オリエンテーション 特選山合会訪問	4/10 オリエンテーション 特選山合会訪問
2 4/13 自校史教育①～「追手門の歩み」を使って	4/14 自校史教育①～「追手門の歩み」を使って	4/15 自校史教育①～「追手門の歩み」を使って	4/16 自校史教育①～「追手門の歩み」を使って	4/17 自校史教育①～「追手門の歩み」を使って
3 4/21 自校史教育②～「追手門の歩み」を使って	4/22 自校史教育②～「追手門の歩み」を使って	4/23 自校史教育②～「追手門の歩み」を使って	4/24 自校史教育②～「追手門の歩み」を使って	4/25 自校史教育②～「追手門の歩み」を使って
4 4/27 学院志研究員の研究員を招いて	4/28 学院志研究員の研究員を招いて	4/29 学院志研究員の研究員を招いて	4/30 学院志研究員の研究員を招いて	5/1 学院志研究員の研究員を招いて
5 5/6 「追手門のために、仲間のために、自分の成長のために」～私が追手門で見つけた宝物	5/5 「追手門のために、仲間のために、自分の成長のために」～私が追手門で見つけた宝物	5/6 「追手門のために、仲間のために、自分の成長のために」～私が追手門で見つけた宝物	5/7 外から見た追手門学院大学 (株)ビジネスリテラシー代表取締役 神楽 邦久氏	5/8 「追手門のために、仲間のために、自分の成長のために」～私が追手門で見つけた宝物
6 5/11 学院長特別の地へのバスツアー(小學校スカイホールでのレクチャー、近隣の散策等)	5/12 学院長特別の地へのバスツアー(小學校スカイホールでのレクチャー、近隣の散策等)	5/13 追手門学院のプロフェッショナル～追手門Menu～	5/14 学院長特別の地へのバスツアー(小學校スカイホールでのレクチャー、近隣の散策等)	5/15 学院長特別の地へのバスツアー(小學校スカイホールでのレクチャー、近隣の散策等)
7 5/19 追手門学院のプロフェッショナル～追手門Menu～	5/20 追手門学院のプロフェッショナル～追手門Menu～	5/21 学院長特別の地へのバスツアー(小學校スカイホールでのレクチャー、近隣の散策等)	5/22 追手門学院のプロフェッショナル～追手門Menu～	5/23 追手門学院のプロフェッショナル～追手門Menu～
8 5/25 追手門をホームに、アウェイで活躍する追手門生紹介！	5/26 追手門をホームに、アウェイで活躍する追手門生紹介！	5/27 追手門をホームに、アウェイで活躍する追手門生紹介！	5/28 追手門をホームに、アウェイで活躍する追手門生紹介！	5/29 外から見た追手門学院大学 (株)ビジネスリテラシー代表取締役 神楽 邦久氏
9 6/1 外から見た追手門学院大学 (株)ビジネスリテラシー代表取締役 神楽 邦久氏	6/2 外から見た追手門学院大学 (株)ビジネスリテラシー代表取締役 神楽 邦久氏	6/3 観メダリスト・観梅様さん 登場！	6/4 「追手門のために、仲間のために、自分の成長のために」～私が追手門で見つけた宝物	6/5 校友会の皆さんのお話 卒業生、大学教員をお招きする ①「貴が故郷」の演劇とイベント(写真でのスライド説明) ②林田会長と新生(壮年)との対談 ③学院教員 敬啓指導
10 6/8 校友会の皆さんのお話 卒業生、大学教員をお招きする ①「貴が故郷」の演劇とイベント(写真でのスライド説明) ②林田会長と新生(壮年)との対談 ③学院教員 敬啓指導	6/9 校友会の皆さんのお話 卒業生、大学教員をお招きする ①「貴が故郷」の演劇とイベント(写真でのスライド説明) ②林田会長と新生(壮年)との対談 ③学院教員 敬啓指導	6/10 校友会の皆さんのお話 卒業生、大学教員をお招きする ①「貴が故郷」の演劇とイベント(写真でのスライド説明) ②林田会長と新生(壮年)との対談 ③学院教員 敬啓指導	6/11 校友会の皆さんのお話 卒業生、大学教員をお招きする ①「貴が故郷」の演劇とイベント(写真でのスライド説明) ②林田会長と新生(壮年)との対談 ③学院教員 敬啓指導	6/12 校友会の皆さんのお話 卒業生、大学教員をお招きする ①「貴が故郷」の演劇とイベント(写真でのスライド説明) ②林田会長と新生(壮年)との対談 ③学院教員 敬啓指導
11 6/15 観メダリスト・観梅様さん 登場！	6/16 理事長、副学長からのビデオレターを視聴して、グループワーク 「創立記念日の集い」のDVD視聴	6/17 外から見た追手門学院大学 (株)ビジネスリテラシー代表取締役 神楽 邦久氏	6/18 卒業生からのビデオレターを視聴して、質問や感想を募集する 「写メのフィールドワーク」	6/19 追手門をホームに、アウェイで活躍する追手門生紹介！
12 6/22 これぞ私の追手門 ～写メで語ろう、追手門	6/23 これぞ私の追手門 ～写メで語ろう、追手門	6/24 これぞ私の追手門 ～写メで語ろう、追手門	6/25 これぞ私の追手門 ～写メで語ろう、追手門	6/26 これぞ私の追手門 ～写メで語ろう、追手門
13 6/29 なぜ私は追手門で教員をやっているのか？	6/30 なぜ私は追手門で教員をやっているのか？	7/1 なぜ私は追手門で教員をやっているのか？	7/2 なぜ私は追手門で教員をやっているのか？	7/3 なぜ私は追手門で教員をやっているのか？
14 7/7 理事長、副学長をお招きして 開学試験対策～特選山合会訪問	7/8 理事長、副学長をお招きして 開学試験対策～特選山合会訪問	7/9 理事長、副学長をお招きして 開学試験対策～特選山合会訪問	7/10 理事長、副学長をお招きして 開学試験対策～特選山合会訪問	7/11 理事長、副学長をお招きして 開学試験対策～特選山合会訪問
15 7/14 開学試験～追手門決定+「貴が故郷」Award	7/15 開学試験～追手門決定+「貴が故郷」Award	7/16 開学試験～追手門決定+「貴が故郷」Award	7/17 開学試験～追手門決定+「貴が故郷」Award	7/18 開学試験～追手門決定+「貴が故郷」Award

- (2) 関関同立や産近甲龍に落ちて、不本意な思いで入学した学生、親や教師の進めるまま、何となく追手門に入ってしまった学生が、日を追うごとに、安心し、自信をつけ、追手門で頑張ろうと思う。「どの大学で学ぶか」よりも「入った大学でどう学ぶか」のほうが百層倍、大事なんだ、と目覚める。確実に学生は育っている。
- (3) マナーや礼儀を教える講座としての位置づけもある。
- (4) 2016年度は全員履修科目になる予定なので、春に5コマ、秋に5コマ開講し、1クラス180名～200名の大人数クラスになる。述べ10名の教員が必要。現有の教員チームでは、理想

的なピアレビューが実現しているが、2016年度以降も維持できるか。

- (5) 将来的には、学生ファシリテータ（追手門ソムリエ特待生・仮称）制度を導入して、大人数授業におけるグループワークを取り入れていく。

5-4 キャリアデザイン論

- (1) 2015年度の秋学期は、22クラス開講予定で、単位認定権者の専任教員が21人、張り付いている。過去5年で内製化する約束で、外部委託してきた。2015年度で任期満了となるが、業者に丸投げに近い状態で、内製化できそうな学部は限られている（社会学部と心理学部）。
- (2) 委託した業者から、2014年度の「キャリアデザイン論」の履修生を対象にしたアンケート結果が届いている。業務委託の成果としては、決して満足できる数値とは言えない。したがって、教務主事会では、全員履修科目から選択科目への格下げもやむなしとなった。
- (3) 全員履修科目から選択科目にし、外部委託をしないということから、来年度は、各学部の特性に合わせた履修指導が行われると考えられる。たとえば、社会学部や心理学部は専任教員でこの科目を担える教員がいらないわけではない。そのほかの各学部からどのような要望が出てくるか。その要望に、基盤教育機構としてどこまで応じることができるか。
- (4) 一方で、秦副学長と就職・キャリア支援課から、基盤の専任教員と専門業者との共同で、「キャリアデザイン論」のプログラムデザインを再構築するという案も出ている。ただし、今度こそ、担当教員と専門業者ががっちりチームを組んで授業運営に当たることを条件にすべきである。
- (5) キャリアデザイン論は、大きく3つの内容からなる。1つは、キャリア意識の醸成～大学生活の設計、2つ目にスタディスキルの養成、3つ目にグループワークによるコミュニケーション能力の養成、仲間づくりである。こうした内容は「新入生演習」や「表現コミュニケーション」と多くの部分で重複している。

5-5 体育科目

- (1) 健康維持、体力増進の内容を、すべての体育科目（実技）に均等に盛り込む。
- (2) 1年生春学期のUNIVERSAL PASSPORTでの体育実技の抽選登録は行わない。学科ごとの曜日・時限指定を行い、授業開始1週目の最初の時限でクラス分けを行う。

5-6 数的処理の基礎、基礎力リテラシー、入門物理学 1

- (1) 2016年度は、2年次以降の「キャリアに直結する基礎教養科目」への導入のためにも、科目の名称変更、配置換えを行い、他の科目との差別化を図り、初年次生を誘導することが必要となる。

- (2) 2015年度春学期の「数的処理の基礎」は、400名の定員×2クラスのところ、29名・71名しか履修者がなかった。少人数なので、私語もなく落ち着いた授業ができているが、来年度以降は、もっと履修者を増やさなければならない。「数的処理の基礎」は選択科目だが、経営学部や経済学部の学生にはもっと履修を促してほしい。
- (3) ただ、科目の名称変更、配置換えは文科省に変更届けが必要なので、学部設置課は難色を示している。

5-7 プロジェクト、表現コミュニケーション

- (1) 2014年度に新設され、基盤教育科目の中でもっとも成功している科目群である。コミュニケーション能力、リーダーシップ、対人交渉能力、プレゼンテーション能力など、社会人基礎力を育成する。
- (2) 仲間と力を合わせて演劇の舞台を作ったり、ペアワークやグループワークを通じて対人交渉能力を磨いたり、コミュニケーション能力やリーダーシップを身に着けたりする。
- (3) リーダー養成コースを志す、意欲の高い学生の輩出母体となっている。また、AP科目生やアサーティブ入試で入学した学生の受け皿の役目も果たしている。

5-8 英語

- (1) 2015年度の基盤英語の担当講師は、専任教員3名、語学常勤講師2名、非常勤講師40名。この45名で春秋合わせて、293クラスを運営している。本学の全開講クラス数が2414クラスだから、実に約8分の1が英語のクラスである。
- (2) 40名の非常勤講師のうち6年以上お勤め方が、22名。中には28年間も非常勤をやっている方もおられる。ちなみに追手門の全非常勤講師は186名だから、4.6名に1人は英語の非常勤講師という計算になる。飛行場に喩えれば、4本の滑走路のうち1本が一飛行機会社で独占されているような状態といえようか。
- (3) 英会話、英語購読、LL、検定英語など、一見、多彩な英語のプログラムが用意されているようにみえて、英語教員間で連携はほとんどなく、テキストもシラバスもメソッドも、各教員に任されており、能力別のクラス分けも不徹底である。
- (4) こうした基盤の英語教育の立て直しが言われて久しいが、基盤教育機構に英語のエキスパートがいない今の状況では、自信をもって大方針を策定することができない。そこで、今の基盤にできることは、半ばアナーキーな基盤英語を少しでも更地化、整地化することしかない。整地化、更地化とは①各学部で、まちまちな履修条件(表9)をできるだけそろえること。②「a.週2日(半期1単位×2) b、語学常勤講師を中心にしたチーム・ティーチング(注4)、c.統一シラバス、統一テキスト導入の英語教育」にシフトしていくこと。③非常勤講

師の雇い止め、およびコマ数削減を同時進行させること。

- (5) 語学学校とタイアップし、「1年更新、最大3年契約」という非常勤講師の縛りを外すという案も浮上している。
- (6) 英語を週2単位で英語講読と英会話にしたところで、追手門の学生が英語に習熟するとは思えないという意見もある。科目の到達目的を具体的なアウトカムにして、個々の学生が興味や魅力を感じる英語プログラムを編み出したらどうだろうか。たとえば、「FACEBOOKを英語で綴れるようになる」、「外国人のパーティーで金髪青い目の外国人と1時間語り続けることができるようになる」、「映画を字幕なしで理解できるようになる」など。

表9 2015年度入学生の外国語科目の学部・学科別卒業要件一覧

学部・学科	外国語科目
経済学部	・英語、仏語、独語、中国語のいずれか4単位以上 ・留学生は日本語を4単位以上
経営学部	・英語、仏語、独語、中国語のいずれか4単位以上 ・留学生は日本語を8単位以上
地域創造学部	・英語を8単位以上
社会学部	・英語、仏語、独語、中国語のいずれか4単位以上
心理学部	・英語、仏語、独語、中国語のいずれか4単位以上
国際教養アジア	・英語、仏語、独語、中国語のいずれか4単位以上
国際教養英コミ	・日本人学生は要件なし ・留学生は日本語4単位以上

5-9 教養科目

- (1) 現況は、人文、社会、自然の3分野に、79科目168クラスがただ放置してあるだけである。新入生は時間割の埋め草に教養科目を利用しているにすぎず、幅広い教養を身につける機会を提供しているとは到底言えない。
- (2) 2015年度春学期は、履修者が200名以上のクラスが18クラス、そのうち300名以上のクラスが13クラス（欧米の文学414名、日本の近現代史504名）ある。このような大人数でまともな授業をするのは至難の業である。授業崩壊の温床となっているといっても過言ではない。
- (3) 表10のような「広く浅く、皆で学ぶ教養科目」（追大BASIS（仮称））を設定する案がある。授業は二コマ続きで、前半を講義に充て、学問の入り口に立つ新入生に、「学びたい、議論したい」という欲動を呼び起こすことを目的とする。教師は体系を教えることはしない。専門分野の十八番を話す“レクチャー”である。一方、後半は学生を少人数のグループに分けて、グループディスカッションをし、成果を発表させる。ここでの教師は“ファシリテータ”である。グループワークには、LAやSAとして、先輩学生が補助に入る。ディスカッ

ションをただの冗漫なおしゃべりに終わらせないためには、前半の講義が啓発的なものでなければならぬのは言うまでもない。なお、追大BASIS（仮称）は、武蔵野大学の「武蔵野BASIS」の「基礎セルフディベロップメント」からヒントを得た。

- (4) 上の「広く浅く、皆で学ぶ教養科目」は、初年次生を対象にした少人数・双方向・参加体験型のゼミナールである。それに対して、2年生以降の教養科目は、本来の教養の名にふさわしい「深く突き詰めて学ぶ教養科目」である。授業目的やラーニングアウトカムが一目でわかるような魅力的な科目名を掲げ、ナンバリングを施してマップ化する必要がある。
- (5) 追大BASISを全員履修化するには、たとえ、2コマ続きを1コマに縮める（4単位から2単位にする）にしても、①配当する教室の絶対数が足りない、②CAP制の問題（地域創造学部の開設にあたって、文科省に届け出た履修上限単位が18であり、安易に変えることは今後の新学部の設置や定員増に悪影響を及ぼしかねない）があつて、難しい。したがって、やむをえず2016年度からの導入は見送らざるを得ない。
- (6) その条件整備の一環として、教務主事会のワーキングでは、①1科目1クラス化を理想形とし、②複数開講を希望する場合は、各学部から要望を出すことになっている。その場合、1クラスの上限を設定する必要がある。

表10 2016年度 教養科目新カリキュラム 追大BASIS(仮称)案

	第1ターム ①～③		第2ターム ④～⑥		第3ターム ⑦～⑨		第4ターム ⑩～⑫		第5ターム ⑬～⑮	
クラス 1	月	教員A	月	教員A	月	教員P	月	教員A	月	教員F
クラス 2	火	教員B	火	教員B	火	教員Q	火	教員B	火	教員G
クラス 3	水	教員C	水	教員C	水	教員R	水	教員C	水	教員H
クラス 4	木	教員D	木	教員D	木	教員S	木	教員D	木	教員I
クラス 5	金	教員E	金	教員E	金	教員T	金	教員E	金	教員J
クラス 6	月	教員F	月	教員A	月	教員P	月	教員A	月	教員F
クラス 7	火	教員G	火	教員B	火	教員Q	火	教員B	火	教員G
クラス 8	水	教員H	水	教員C	水	教員R	水	教員C	水	教員H
クラス 9	木	教員I	木	教員D	木	教員S	木	教員D	木	教員I
クラス10	金	教員J	金	教員E	金	教員T	金	教員E	金	教員J
クラス11	月	教員F	月	教員A	月	教員P	月	教員A	月	教員F
クラス12	火	教員G	火	教員B	火	教員Q	火	教員B	火	教員G
クラス13	水	教員H	水	教員C	水	教員R	水	教員C	水	教員H
クラス14	木	教員I	木	教員D	木	教員S	木	教員D	木	教員I
クラス15	金	教員J	金	教員E	金	教員T	金	教員E	金	教員J
クラス16	月	教員F	月	教員A	月	教員P	月	教員A	月	教員F
クラス17	火	教員G	火	教員B	火	教員Q	火	教員B	火	教員G
クラス18	水	教員H	水	教員C	水	教員R	水	教員C	水	教員H
クラス19	木	教員I	木	教員D	木	教員S	木	教員D	木	教員I
クラス20	金	教員J	金	教員E	金	教員T	金	教員E	金	教員J
クラス21	月	教員F	月	教員A	月	教員P	月	教員A	月	教員F
クラス22	火	教員G	火	教員B	火	教員Q	火	教員B	火	教員G
クラス23	水	教員H	水	教員C	水	教員R	水	教員C	水	教員H
クラス24	木	教員I	木	教員D	木	教員S	木	教員D	木	教員I
クラス25	金	教員J	金	教員E	金	教員T	金	教員E	金	教員J

開講：春学期・秋学期。クラス指定、全員履修。

月～金の毎日、2時限連続開講（1時限目は講義、2時限目はグループワーク）4単位科目

計5分野、各分野に5人の教員。各教員は1つのクラスで3回（講義&GW）ずつ担当、5つのクラスを回る。

今の時点では、同一分野内でのシラバスの統一は考えていない。

春学期・秋学期それぞれ25クラス、計50クラス（1クラス35人程度）

従来の教養科目を廃止するのではない。

1年次に追大BASIS(仮称)で広く学んだうえで、2年次以降に従来の教養科目で深く学ぶことを想定している

5-10 日本語表現

- (1) 「日本語表現」は、2015年度からの新規開講科目である。二つのタイプの「日本語表現」があり、公務員試験対策、SPI対策に特化した内容の200名クラスの「日本語表現」(3クラス)と、1クラス20名程度の少人数で、徹底した添削指導を売り物にする「日本語表現」(15クラス)がある。
- (2) 少人数の「日本語表現」は、2016年度に全員履修科目にする方針だった。1クラス20名を35名～40名にしても、クラスを増やし、全部で50クラスくらい開講できないものかともくろんだが、教務主事会で、各学部の教務主事から「新カリキュラムで手いっぱい、とても人は出せない」といわれて断念した。
- (3) 今のところ、少人数の「日本語表現」を全員履修科目にする学部は、地域創造学部だけだが、基盤教育機構には7クラスほど「日本語表現」の開講の用意がある。学生に履修を促したい学部には提供できる。
- (4) 少人数の「日本語表現」は、書くことに重点を置いた科目なので、文章表現コンクール「青が散る」Awardとの連携も視野に入れるべきである。

5-11 教養ゼミ

- (1) 今年度は過去最高の開講数を記録(春22クラス、秋24クラス)した。
- (2) 来年度から始まる「オープンゼミ」との差別化が課題である。初年次科目である「教養ゼミ」から、発展的な内容の「オープンゼミ」への流れができるか。

5-12 キャリアに直結する基礎教養科目(=公務員対策講座)

- (1) 2016年度から本格的に始まる、基盤教育機構、教務課、就職・キャリア支援課のタイアップ科目。目標は「追大スタンダードの構築」である。すなわち、できるだけ多くの追大生に、卒業までに、最低、身につけてほしい基礎学力を保证する科目群である。
- (2) 将来、公務員(教員や一部上場企業も含む)を目指す学生に対して、2回生から「数的処理」と「文章理解」と「社会科学」を中心に、正課科目として開講する科目群。正課外の資格認定講座やエクステンション科目とは一線を画す。
- (3) すでに2015年2月に業者選定のコンペを実施し、授業内容も具体的に決まっている。講師はLEC東京リーガルマインドから派遣することになっている。
- (4) 目標は、今の1年生が卒業年度になったとき、公務員試験合格者が80名から100名出ていることである。
- (5) 2015年春学期、「新入生演習」の授業中に、全新生1585名を対象に「学びのトレーニング(マナトレ)認定テスト」(ベネッセ・キャリア担当)が実施された。教科は「算数・数学」

と「国語」の2科目で、英語については実施されていない。国語については、中学入試初級から中級レベルの多肢選択型問題で、日常的に使われる慣用表現、とくに書き言葉で多用される言い回し（例：たちどころに、気が置けない、ひざを交える、目を皿にする、鈴なりなど）に不正解が目立つ。また「算数・数学」については、小学校中学年から中学校3年生の基本問題で、単位換算を伴う比率問題や食塩の濃度を求める問題、また円錐や球の体積を求める問題やルートを伴う演算問題の出来がすこぶる悪い。総じて心理学部の学生が頭一つ抜けており、アジア学科の学生が低迷している。教員採用試験、公務員採用試験、SPI試験の対策を進めていくにあたり、基礎的な学力が不足している学生、とくに数理的な処理能力に苦手意識を持っている学生が多いことが明らかになった。

- (6) 同時に、マナトレと同時に行われたアンケート結果から、学習習慣が形成されていない学生が大多数を占めていることも見えてきた。「自宅学習時間は？」という問いに対して、「ほとんど勉強しない」と答えた学生が、実に1017名に上る。また、自分の勉強と成績の関係に関する問いにも「勉強不足だから成績が悪くても仕方ない」と答えた学生が913名もあり、学習習慣の欠如を自覚しているながら、地道な努力を怠っている本学学生の実態が明らかになった。
- (7) 基礎学力と学習習慣を身につけていない学生を、いかに「キャリアに直結する基礎教養科目」に振り向けるか、いかに学習意欲を奮い立たせるか、これは重い課題である。
- (8) この「キャリアに直結する基礎教養科目」に、できるだけたくさんの初年次生を集めるために、今年から基盤教育科目の中に、「日本語表現」「数的処理の基礎」「基礎カリテラシー」「入門物理学1」という導入科目が設けられた。ところが、履修生は到底定員に及ばない。たとえば、春学期の「数的処理の基礎」は、400名の定員×2クラスのところ、29名・71名しか履修者がなかった。秋学期はさらにひどく、28名・27名である。また、「基礎カリテラシー」は春学期18名、秋学期13名、「入門物理学1」は57名、秋から始まった「日本語表現B」は、200名×3クラスのところ、56名・38名・23名しか集めていない。理由は2つある。一つには、名称の問題、もう一つは科目の配置の問題である。「日本語表現」にしても「数的処理の基礎」にしても「基礎カリテラシー」にしても「入門物理学1」にしても、受験勉強に苦手意識のある学生にはアレルギーを催す名称だし、そもそも授業内容を正確に反映していない。（「入門物理学1」は理科全般、「基礎カリテラシー」は社会科全般）。

また、これらの導入科目は、「日本語表現」以外はすべて教養科目の中に位置づけられていて、完全に埋没している。すなわち、新入生の読み書きそろばん能力を高める大事な科目であるにもかかわらず、新入生の履修を全く促していない。

そこで、基盤教育機構では、教務主事会の懇談事項（審議事項ではない）の中で、「追手門UI論」と「入門コンピュータ」の全員履修化と抱き合わせにして、「数的処理の基礎」「基

礎力リテラシー」「入門物理学1」の名称変更と、教養科目から初年次科目への配置換えを提案した。

注

- 1) 2015年8月現在:教授9名、准教授2名、専任講師1名、語学常勤講師3名、特任助教1名、計16名。
- 2) たとえば、立命館大学には「共通教育推進機構」という、教養教育やキャリア教育やサービスマーケティングを統括する組織があるが、教授会を有しない。また、桜美林大学には「基盤教育院」という教員組織があつて、学ぶ意欲や基礎学力を高める教育プログラムを組んでいるが、やはり教授会はない。本学心理学部の浦光博学部長からのご教示では、広島大学には、教養科目を担当する教員からなる総合科学部という組織があり、教授会を持っているとのことである。
- 3) 2015年7月の常任理事会で、収容定員数が101名から150名の5教室のうち、3101教室をのぞく4教室(3106、3201、3202,3204)および、収容定員数が61名から100名の3教室(2204、2311、3203)については、秋学期より視聴覚設備が備え付けられることになった。また、収容定員数が31名から60名の13教室(2201、2202、2203、2205、2206、2302、2303、2304、2309、2310、2401、3102、3103)については、秋学期より多少ずれ込む可能性もあるが、カート式の視聴覚機材の配備が予定されている。
- 4) ここでいう「チーム・ティーチング」とは、同一科目を、複数の教員が緊密に連携をとりながら運営する態勢を意味している。複数の教員がそれぞれの役割を担って同一クラスを運営する「チームティーチング」とは異なる。